

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	16-122	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名（原題／訳）		
Lifetime alcohol use and cognitive performance in older adults. 高齢者における生涯飲酒量と認知機能		
執筆者		
Kalapatapu RK, Ventura MI, Barnes DE		
掲載誌		
J Addict Dis. 2017 Jan-Mar;36(1):38-47. doi: 10.1080/10550887.2016.1245029.		
キーワード	PMID	
アルコール、認知、高齢者、薬物使用	27719514	
要 旨		
目的： 飲酒と認知機能との関連を検討した先行研究は相反する結果を報告しており、理由として交絡因子の調整が不十分あるいは過剰であったためと考えられる。本研究で我々は非飲酒（ごく少量飲酒者を含む）・過去飲酒者に比べて現在飲酒者の認知機能が低いと仮定し、133 人の高齢者における自己報告に基づく生涯飲酒量と認知機能との関連を検討した。		
方法： 飲酒別に非飲酒（または、ごく少量飲酒）、過去飲酒、現在飲酒に三分類した。神経・認知機能として注意、記憶、流暢、および執行（executive function）の各機能およびその総合評価を用いた。調整項目の選択（すなわち交絡因子の同定）には DAG (directed acyclic graph：有向非循環グラフ) 法を用いた。		
結果： 未調整解析結果では飲酒と認知機能の関連を認めたが、以下の項目で調整すると飲酒と認知機能との関連は一切認められなくなった：年齢、教育、性、人種および生涯喫煙量（pack-years）。現在および過去飲酒者に限定し、飲酒年数との検討においても、認知機能と飲酒年数の関連は認めなかった。		
結論： 飲酒と認知機能は主要な交絡因子を調整すると関連を認めなかった。		